

2025.8

Vol. 188

くすのき

Kusunoki

巻頭特集

女子教育の未来を 切り拓いていきたい



こもれびの窓

P.3

お客様に心を尽くす笑顔のおもてなしで多くの幸せを届けたい
金井 仁美さん

特 集

P.5

2026年4月 学芸学部
言語文化コミュニケーション学科を新設。

SHOIN LABO(大学)

P.7

「食」と「暮らし」から社会を学び、人生の糧に。
濱田 信吾教授

SHOIN LABO(中学・高校)

P.9

STEAM教育を通して生徒の探究心を育む。
川浪 隆之教諭



はばたけ、知性。



時代を超えて
躍進し続ける。



創設当初の授業の様子



創立当時の橋橋上にて(森 平蔵・伊賀駒吉郎・朝田源造)



北海道旅行 登別温泉にて
(1928年)



電気コンロを使った割烹の授業
(1929年)



宝塚ホテルでの試食会
(昭和初期)



児童学科のゼミ(1950年)



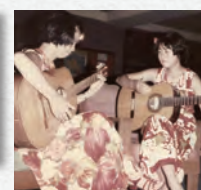
化学の実験の授業(1936年)



高等学校体育祭(1962年)



ヨーロッパセミナー。
ロンドンの国会議事堂を背景に
記念撮影(1978年)



ハワイゼミナールで
「ハワイアンギター」の発表
(1971年)



高等学校の生徒が参加した
ハワイゼミナール
(1972年)

Chapter 02

樟蔭で育んだ内面の輝き。

「美しく生きる力」を、これからも。

皆さんもご存じのとおり、樟蔭学園が大切にする“美”とは、外見ではなく、知性・情操・品性の調和から生まれる内面の輝き「樟蔭美」です。これは思いやりや自立心、しなやかに生きる力の象徴でもあります。まさに樟蔭で育まれた“心の芯”そのものです。この“美”の価値をより明確に継承するため、「Shoin Vision 2030」を掲げました。伝統を礎に、知識だけでなく実践力・行動力を育む教育を推進し、社会に貢献できる女性の育成を目指しています。

皆さんがその“美”を胸に、社会の中で輝き続けてくださることこそが、私たちにとって最大の喜びです。「強く、しなやかに、美しく、」この言葉とともに、私たちはこれからも真の美しさを育て続けます。

女子教育の未来を

切り拓いていきたい。

Chapter 01

変わらぬ“樟蔭の精神”と共に。

時代を超えて、進化し続ける学び。

大正時代、女子教育は「良妻賢母」の育成が中心で、家事や礼儀など実用的な学びが重視されていました。しかし、大正デモクラシーの広がりとともに女子の進学熱が高まり、特に大阪では受験競争が激化していました。そんな中、実業家・森平蔵は「女子こそ学びで未来を築くべき」との思いから、1917年に樟蔭学園の前身を設立。文学や芸術など幅広い教養を学べる環境を整え、当時としては先進的な教育を実現しました。

また、初代校長・伊賀駒吉郎は「教育を通じて女性の人間力を高める」ことを使命とし、その理念は今も学園に息づいています。現代においても私たちは“知識”だけでなく“考える力”“伝える力”“行動する力”を育むことを重視し、PBL(課題解決型学習)やICT活用など、社会に必要な学びの提供に力を注いでいます。

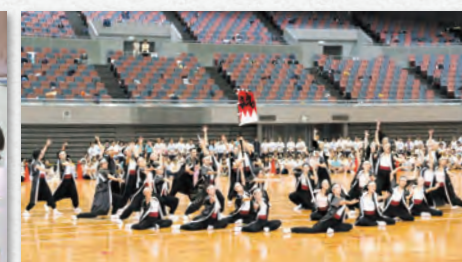
時代が変わっても“人を育てる”という樟蔭の根っこの教育は変わりません。時代が急速に変化する中、これからも私たちは「教育の本質」を追い求めていきます。



学校法人樟蔭学園 理事長
森 眞太郎



SHOIN子育てカレッジ



「青春の躍動」



樟蔭国際学習センター(SILC)でネイティブと会話を楽しむ学生



中学校・高等学校における電子黒板とiPadを併用した授業

Chapter 03

“女子教育の価値”を追い求め、躍進し続ける。

少子化が進む中で、「共学の方が社会性に役立つ」「女子大は進路が狭い」といった声もありますが、理系分野への挑戦や起業・リーダー人材の育成など、多様な進路が求められる時代だからこそ“女子教育の価値”を見直すときです。

樟蔭学園では創立以来、「自ら選択し、自分の力で生きる力を育てること」を大切にし、自分のペースで学び、自身を信じて挑戦できる環境があります。現在はSTEAMやグローバル

な探究活動にも力を入れ、第一線で活躍できる女性の育成に取り組んでいます。

時代に応じて柔軟に変革しながらも、女子教育の本質を守り、自分の「引き出し」をたくさん使えるような人材を育てたいと考えています。卒業後も、皆さんが「樟蔭生であることに誇りを持てる」。そんな学園であり続けるよう努めてまいります。



FEATURE

お客様に心を尽くす 笑顔のおもてなしで 多くの幸せを届けたい

長島観光開発株式会社
ホテル花水木 フロント係 係長

金井 仁美さん

2004年3月大阪樟蔭女子大学 人間科学部
応用社会学科卒業(関屋キャンパス1期生)。
新卒社員として長島観光開発株式会社に入社。
ホテル部花水木に配属、顧客管理、お客様へのご提案やご案内、
ご相談受付など、フロント係として総合窓口の役割を担う。
コミュニケーションを大切にしておもてなしで、お客様からの信頼も厚い。



01 応用社会学科の学びと恩師との出会い

私は昔から好奇心旺盛な性格で、大学に入る前もひとつの分野に絞るより様々なことを学びたいと考えていました。そんな時に出会ったのが、大阪樟蔭女子大学です。中でも人間科学部 応用社会学科では、社会のしくみや課題を多角的に学べる点に心惹かれたことを今でも覚えています。

実際に入学してみると、マーケティング、政治学、心理学など、多種多様な分野の講義を自由に選べるカリキュラムで、毎回新しい発見がありました。中でも心に残っているのが、徳永先生の講義で学んだ「ヤマアラシのジレンマ」の話です。ヤマアラシがお互いに寄り添いたくても、針が刺さってしまうというジレンマから、人との距離感や関係性を考える内容なのですが、強く心に残りました。「人としての生き方」を考えさせてくれた講義だと思っています。

もうひとつ、私にとって大きな出会いだったのが、元電通の奥西先生のゼミです。広告やマーケティングを学ぶ中で、人の心を動かす言葉やデザインの力を知り、社会や顧客のニーズを満たすためにどうすればよいのかということを学べたのは貴重な体験だと思います。

奥西利勝ゼミ最終日
奥西先生への
感謝の会にて



卒業後、2015年3月7日
当時の学長 徳永正直先生と
関屋キャンパスお別れ会にて

また勉強について悩んでいた時、先生が「あなたにはひらめきがあるから大丈夫」と背中を押してもらい、とても救われました。卒業後も先生には何度もお会いしてお話を聞いていただき、今でも忘れられない大切な恩師です。

応用社会学科では、知識だけでなく、私らしく前に進むための「気づき」をたくさん与えてくれました。今、社会で働く中でも、あの時の学びが自分の芯にあると確信しています。



02 学生時代の仲間が、心を支える生涯の友に

よく「今もそんなに大学の友達と仲がいいの?」と驚かれるのですが、ずっと連絡を取り合っています。中でも当時、「アウトドア派部」のサークル仲間は一生の友達で、離れていても心は繋がっているかけがえない存在です。

悲しいことに、仲間のひとりが32歳の時に病気で亡くなったのですが、大学で最初にできた友達だったこともあり、本当に辛くて体調を崩すほどでした。ただ、その友達と過ごした時間はとても尊い時間だったし、出会いを無駄にしてはならない。そして「当たり前前のことはない」と気づかされ、彼女との出会いが私に生きる意味を教えてくださいました。今ではよく仲間と「会いたい時に会って、行きたい場所に行こうね」と話をするようになり、より強い絆が生まれたように思います。

03 一生懸命向き合えば、想いはきっと届く

ホテル花水木では、イベントや国際行事の対応もあり、その度に学生時代に学んだ「気持ち伝える力」「一生懸命向き合う姿勢」が役立っています。特に2016年の「ジュニア・サミットin三重」では、各国から訪れた子供たちのアレルギーや食文化の違いを把握しながら丁寧に接したことで、最後に子供たちが笑顔で「ありがとう!また来ます!」とハグしてくれた時は、本当に感動しました。「文化や言葉が異なっても気持ちは伝わるんだ」と、この仕事について改めてよかったですと思いました。

また大学の校外学習で、応用社会学科の先生方に長島リゾートを2回も選んでもらったというありがたい機会もいただきました。社会に出てからも恩師の方々とながかりが持てるのは、樟蔭の魅力のひとつだと実感しています。



04 樟蔭で育った想いが、 今も心の中に生きている

フロントの仕事は大変ですが、「好き」という気持ちと、大学時代の仲間や先生方の支え、樟蔭で学んだ「感謝の気持ち」や「思いやり」が今の仕事の土台となっています。

お客様が訪れる理由は、大切な記念日や家族の思い出作りなど様々で、その一瞬を「幸せな時間」にしたいと日々努めています。そう思える自分がいるのは、大学での学びと人とのつながりがあったからこそ。私にとって樟蔭は、自分の軸で歩む強さを育ててくれた場所です。



この度、ホテル花水木様で
取材をさせていただいた
ダイニングルームの名称が
偶然にも「くすの木」でした。
こんなところにも樟蔭のご縁を
感じる瞬間がありました。

05 当たり前じゃない今日を、 大切な人と重ねていく

私の原点は「どんなことにも一生懸命でいたい」。良いことも辛いこともすべてに意味があると感じ、全力で乗り越えてきた経験が私を成長させてくれました。

在学生の皆さんには、大学で出会った人たちを大切にしてほしいです。そして同窓生とは「会いたいときに会おう」「行きたいときに行こう」と、みんなで誓った言葉を大事にしていきたいです。

私にとって大学時代は、一生の友達と出会えた大切な時間。改めて「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えたいです。



卒業生の方々のご活躍の様子をお知らせください。
学園広報課：TEL.06-6723-8152

ご活躍されている卒業生の情報をお寄せいただき、みなさまの力をお借りして、「こもれびの窓」で卒業生の姿をお伝えしていきたいと思ひます。身近でご活躍の卒業生の様子を学園広報課までお知らせくださいますよう、お願いいたします



特集

2026年4月、学芸学部に 言語文化コミュニケーション学科を 新設。

GLOBAL
×
LOCAL

CHECK

現代に求められるグローバル人材の養成

テクノロジーの発展とともに、グローバル化が急速に進む現代。異なる文化や価値観を持つ多様な人と触れ合う機会も多く、スムーズなコミュニケーションを取るためのデジタル技術の活用も年々進んでいます。本学科では語学力の習得はもちろんのこと、言語や文化などの多様性を学び理解することで、これからの社会で活躍できるグローバル(グローバル×ローカル)人材を養成します。

グローバル人材とは
言語や文化的背景の多様性を理解し、地域社会で他者と共生するために、デジタル技術を活用しながら円滑なコミュニケーションを図る能力を持った人。

養成する人材像



多様な人間関係の
要として輝ける人へ

グローバルな視点から言語や文化の役割を理解し、多様性を尊重しながら地域で協働し、多様な人間関係の要となる人材。



実践的な言語運用能力を
駆使して活躍できる人へ

日本語や国際語としての英語の特性のみならず、それぞれの社会・文化的背景を理解しながらコミュニケーションに役立つ総合的な言語運用能力を持つ人材。

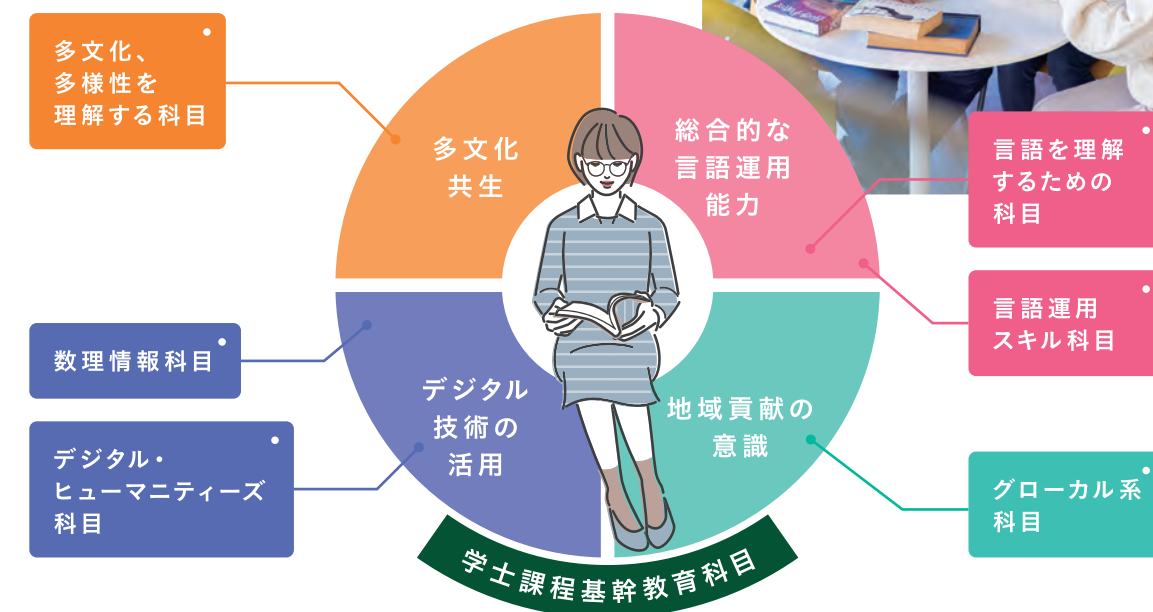


言語とデジタル技術を
活用し未来を切り拓く人へ

人間の言語活動、言語表現に対し、デジタル技術を活用してアプローチし、その社会・文化的背景をも射程に、地域で活躍する人材。

学科の学びと将来像

言語運用能力に加えて多文化・多様性を理解したり、言語に関わるデジタルスキルを学ぶことで、グローバル人材に必要な資質・能力を身につけます。



将来像

公務員(地域行政) | 国際的に事業を展開する企業 | テマパークなどのエンターテインメント業界
航空・観光などインバウンド関連企業 | 英語教員(中学・高校) | 地域に根ざしたグローバル企業

GLOBAL × LOCAL

GLOBAL

海外文化演習

時間 / 2年次春期



言語文化コミュニケーション学科では、単なる語学力の向上だけではなく、実際に外国の文化に触れ、異文化交流を経験できる、独自の留学プログラムを用意しています。(希望制)

LOCAL

グローバルマネジメント演習

時間 / 4年次春期



「グローバル」とは、グローバルな(地球規模の)視点をもちつつ、ローカルな(地域に根差した)文化や特性を理解して地域課題の解決に取り組むことをさす言葉です。この授業では、グローバルな視点で地域社会の問題の解決をめざします。

世界を知り、地域に貢献する、グローバルに活躍できる人材を。

「食」と「暮らし」から

社会を学び、人生の糧に。

濱田 信吾 先生

大阪樟蔭女子大学
学芸学部 ライフプランニング学科
フードスタディコース 教授

アメリカでのアイヌ研究を経て、「ニシン」へと研究テーマを深めていった濱田先生。これまで現地調査などを通じて得た経験は、ライフプランニング学科の授業にも活かされています。現場でのリアルな学びを大切にしながら、学生一人ひとりと真摯に向き合うその姿勢についても伺いました。

Chapter | 01 | アメリカで出会った人生の研究テーマ

当時、アメリカの大学院で先住民の研究に進もうと考えていた私に、指導教授から「まだ研究者が少ないアイヌについて研究してみては」と勧められたことが、私の研究活動における転機でした。私が専門としていた文化人類学は、異文化を通じて自分たちの社会を見つめ直す学問。そのとき「アイヌって知ってるようで実は知らないな」と気づき、日本の中にある“異文化”を探究したいと思うようになりました。ただ、社会政治的に不条理な立場におかれる先住民を研究対象とする倫理的ジレンマに悩んでしまい、そのときに出会ったのが、「ニシン」でした。

北環太平洋の両側で乱獲されたニシンの歴史をきっかけに資源管理に関心をもち、先住民と自然の共生や持続可能な漁業のあり方を考えるようになりました。研究は多くの水産物を輸入する日本の食生活や歴史を見直す契機となり、今もニシン研究を続ける原動力になっています。

Chapter | 02 | 子持ち昆布から紐解く持続可能な食生活

現在、取り組んでいる子持ち昆布の研究では、日本の食文化としてだけでなく、北太平洋を舞台にした人々の暮らしや資源の流れ、政治経済的な力学に注目しています。数の子は室町時代から食べられていましたが、子持ち昆布が日本市場に広まったのは1970年代になってからで、日本の水産パイヤーがカナダやアラスカの先住民の食文化に着目し、輸入・商品化したのがきっかけのようです。私はその北米の先住民の伝統食が日本市場向けの商品になった過程と、それが北米沿岸社会と先住民の暮らしに与えている影響を現地調査を通じて追っています。

日本と現地では生活の根幹を担う地域の食資源への意識に大きな差があるようです。日本人が子持ち昆布という北米の地域資源を日本人のために商品化し大量収穫する背景を知ること、食と資源のつながりや持続可能性についてより深く考える契機になればと考えています。



Chapter | 03 | 社会に役立ち、人生を変えるリアルな学び

ライフプランニング学科は、一言で言えば「社会で役立つことを学べる学科」です。学科には「ライフデザインコース」と「フードスタディコース」があり、ライフデザインコースでは、資産運用や年金、保険といった金融リテラシーを学び、国家資格であるファイナンシャル・プランニング技能士を1～2年生で取得する学生も多くいます。またフードスタディコースでは、食文化や調理技術と知識に加えて、持続可能な食のあり方を食料経済学の視点から学びます。

これらは高校生の時にはピンとこないかもしれませんが、専攻した学生は皆、口を揃えて言います。「今学んでいることが、社会に出たら絶対に役立つ」と。仕事をしながら「どうお金を管理するか」「どう食べて未来を守るか」は、まさに現代の必修科目です。時代がようやくこの学科に追いついてきた、そんな実感があります。



Chapter | 04 | フィールド型の学びで食と暮らしのつながりを知る

私が担当しているフードスタディコースは「食べるのが好き」「カフェを開きたい」という思いから一歩進んで、“食の背景”を学ぶことに重点を置いています。生産や流通といった食を取り巻く全体のシステムを理解し、どのようにビジネスや社会課題とつなげていけるのかを実践的に学ぶように、現場に足を運ぶフィールドワークも積極的に取り入れています。例えば徳島での柚子の収穫体験では、過疎化問題や耕作放棄地、自給率といった地域課題にも触れ、単なる農作業体験ではなく、どう次につなげるかを考える力を養っています。

また、株式会社マルハニチロ北日本さんと行った共同プロジェクトでは、国産魚にこだわった缶詰商品を切り口にしたレシピ開発や、コスパ・タイパといった消費者意識の探究にも取り組み、調理技術やレシピ提案を通じて、環境にも家計にもやさしい食のあり方を学生たちと模索しました。

食と暮らし、社会との関係を広く捉え、「食べることの意味」を深く考える力を育てることが、このコースの本質です。



Chapter | 05 | 女子大学の学びを最大限に活かして輝く未来へ

女子大学の学びを最大限に活かして輝く未来へ

ニシンの研究に取り組み15年、アラスカのフィールドで研究し、国内外の学会で発表を重ねる中で、知識は蓄積されましたが、むしろ「もっと知りたい」という想いが強まっています。次なる目標は、その蓄積をしっかり“かたち”にして社会に還元していくこと。ニシンをめぐる資源管理や貿易、そして食文化の背景には、今の時代に必要なヒントが詰まっています。だからこそ、研究成果を社会に発信していくことが私の使命だと思っています。

また教員としては、女子大学の価値を高め、花嫁修業ではなく「社会で活躍できる力」を育てる場として、ライフプランニング学科が時代に必要とされる存在であり続けるために尽力していきます。起業やDX、AIなど、未来を切り拓くためのスキルをしっかりと育みながら、学生一人ひとりが“自分の人生を設計できる”ような教育を続けていく。それが私の目指す教育であり、この学科のこれからのを支える基盤でもあります。

卒業生の皆様へのメッセージ

Message to Graduates

卒業生の皆さんには、自分が社会の一部であることを意識し、より良い社会づくりに自らの意思で行動し続けてほしいと願っています。特に印象に残っているのは、3年前の卒業生たちの姿です。第49回衆議院議員総選挙（2021年10月31日実施）では、4年生の投票率が100%、3年生も94%と、驚異的な数字を記録しました。思えば彼女たちは、地域課題を学ぶ現場に多く連れて行った学生たち。現場で得たリアルな気づきが、社会への関心や責任感につながったのかもしれない。

社会課題は一見、自分とは関係のないものに思いがちですが、日常の選択や行動も社会とのつながりの一部。無関心ではなく、考え、動ける人に育ってほしいと願っています。

